

特集 「嘘」によせて

下 垣 仁 志

本特集号は、二〇二四年四月二〇日に開催した史学研究会例会の報告をもとにしている。今回の共通テーマは「嘘」。近年、マスメディアを飛び交うフェイクニュースやプロパガンダ、膨大な情報にまぎれこむ悪質な虚偽にどう対応すべきかが、社会的な大問題になっている。この問題をあつかった書籍も、この数年で急増している。

歴史学の世界でも、「捏造」の語を社会に普及させた旧石器捏造事件や椿井文書騒動、戦争責任や領土問題などをめぐる幾多のデマと虚偽情報の蔓延など、この手の問題は枚挙に遑がない。

世相をおびやかす虚実の揺らぎに、歴史の専門知がいかに応答できるか。この問題意識から、今回の共通テーマが決定された。テーマ選考のさい、当初は多くの候補案から「偽史」が最終候補に残ったが、より包括的なふくみをもたせる意図もこめて、「嘘」に決定した。

本特集にあたって、例会の報告者である上峯氏（考古学）・佐藤氏（東洋史学）・上杉氏（地理学）・浜井氏（現代史学）に報告内容を執筆していただいたほか、山口氏（西南アジア史学）と小山氏（日本史学）と朴氏（メディア文化学）に、本テーマに関連する論文の寄稿をお願いした。このほか例会において、小澤実氏（西洋史学）に「神話、歴史、そして「嘘」——中世デンマークにおいて「歴史を書くこと」——をご報告いただいた。本特集に収録された論文は計七本。時代は旧石器時代から二一世紀まで、地域は世界の複数の国々におよんでいる。気鋭の研究者の力作をご堪能いただきたい。

ところで、寄稿者七名のうち四名が、私と同じ一九九五年入学組である（うち三名が文学部の同学年）。思いおこせば、同年は偽史に彩られた年だった。入学直前に偽史的想像力に塗れたオウム真理教による地下鉄サリン事件が起こったのを皮

切りに、トンデモ本批判の嚆矢である『トンデモ本の世界』が刊行され、偽史的ガジェットに溢れた『新世紀エヴァンゲリオン』が社会現象をまきおこした。さらに、グラハム・ハンコックの『神々の指紋』が邦訳され、超古代史ブームを再燃させた。寄稿者の方々がどうであったかはわからないが、少なくとも私個人が偽史や「嘘」に関心を抱くようになり、本例会のテーマの候補案として提出したのには、このような背景がある。

いま「再燃」という言葉を使ったが、「嘘」や偽史は周期的にブームになる。ハンコック・ブームのさいに、「四半世紀ごとにこういうブームが来るとすると、次は二〇二〇年ごろか」と予想した方がいて、ではそろそろかと思っていた数年前に土偶騒動が起きた。この騒動にはいろいろな方が言及されているが、現代特有のスクランダルのような評価が多いことが気にかかる。偽史ウォッチャーの私からすれば、むしろ既視感に溢れた論理と論調が世間に受けたのであり、過去の事例にうとい研究者の見識の狭さにむしろ危機感を覚えた。

この種の「研究」の手口には共通性があり、それを知るのは迂闊に欺されない予防薬になるだけでなく、他山の石として専門研究の方法論を磨く契機にもなりうる。「嘘」や偽史といったネタは、一般の関心をひきやすく、ともすれば「嘘」を暴きたてたり嘲笑するだけの興味本位の行為に陥りやすい。マスコミが関与しだすと、「嘘」とのプロレスにまきこまれかねない。

しかし、報告・寄稿論文は「嘘」に真正面から取り組みつつ、自身の専門分野の方法論を磨く鏡としても「嘘」をあつかっており、やはり一線の研究者はちがうなと感心した。報告・寄稿論文があつかう「嘘」は、時代や地域の固有性がある場合もあれば、それを貫く共通性も看取できる。七本の論文を併読することで、「嘘」をめぐる固有性と普遍性をとらえ、読者自身の専攻分野に応用する、という読み方もあるのではないか、とも思った。

妙な雑談になってしまったが、以下に簡単ながら諸論文の要点を述べておきたい。

上峯篤史「石器認定の思考―日本列島における約四万年前を遡る石器の認識―」は、「嘘」が考古学的思考の「穴」に

忍びこむメカニズムを、国内外の事例の丹念な検証にもとづいて明らかにする。資料の実証と蓄積のうえに仮説や理論を構築し、新資料でその可否を検証する考古学は、まさに科学的な営みを実践してきた。そんな考古学がなぜ、旧石器捏造を看破できず、社会的な大事件になるまで傷口を広げてしまったのか。仮説や理論の予測する資料が発見されると、即座に受けいれる反面、その射程外の資料は気づかれずらしい。そんな思考の「穴」を衝いて、捏造や「嘘」が侵入するのだと説く。そのメカニズムを克服できていない現状の研究動向に警鐘を鳴らしつつ、具体的な研究視座を示すことで、「穴」をふさぐ方途が探られる。

佐藤信弥「弁偽の偽——近年の金文・簡牘の偽作説をめぐる——」は、これまで別個に真偽の弁別がなされていた金文と簡牘について、素材の差異をこえて横断的かつ精緻な検討をほどこすことで、より具体的かつ柔軟な弁偽への指針が示される。末尾によせられた、非発掘資料への極度に潔癖な姿勢への疑義は意義深い。考古学では「考古学者自ら発掘し、発掘地点、共存遺物の明なるもの」を最上の「第一等遺物」、「真偽不明なるもの」を最低の「等外遺物」とする伝統的な評価基準がある。本論の対象は「等外遺物」と「発見地不明なるも、真物たること疑なきもの」である「第三等遺物」であるし、遺物を人間の行為の産物とみる立場からは、器物に書かれた文字も人工物の一部になる。そうした器物を釈読と切り離してよいとの提言と、上記のような考古学の方法論とが、緊張感のある対話をくり広げることで、さらなる議論の展開が期待できるのではないかと思う。

上杉和央「『嘘』からみた地図史」は、「嘘」という観点を足がかりに、地図・作者・読者の関係態から（作者が読者を想定しない地図）、〈特定の読者を想定して作られた地図〉、〈不特定多数の読者を想定して作られた地図〉に大別し、地図と「嘘」のありように迫る。豊富な事例をあげつつ、意図的な欺瞞から結果的な「嘘」まで、地図を介した作者と読者の関係に、さらには三者（地図をふくむ）のおかれた脈絡のなかで、多様なグラデーションの「嘘」が生じることが示される。「嘘」か否かの二元論ではなく、それをめぐるアクターと、受容と利用をめぐるコンテキストとを射程にいれた本論

は、「嘘」をも包括する地図・作者・読者の織りなす社会関係を豊かに復元する可能性を期待させる。

山口元樹「民族覚醒」の起源をめぐる謬説とその継承——独立後インドネシアにおけるイスラーム的ナショナリスト史観——では、定説への異説として、インドネシアにおけるナショナリズム団体の嚆矢をイスラーム商業同盟とみる謬説をとりあげ、従来のインドネシア中心主義のナショナリズム史観にたいして、イスラーム的ナショナリズム史観が台頭した経緯と背景が丹念に探られる。歴史学からくり返し否定されながらも、政治的・社会的風潮を追い風にして、大衆作家などの筆をつうじて、明らかな謬説が草の根的に蔓延してしまう事態は、対岸の火事とは思えない。ナショナリズムに訴えかける謬説が止まない日本の歴史学を考えるうえでも興味深い分析である。

余談になるが、シュリーマンのトロイ発見という有名な偉人伝がある。少年のころの夢をいだきつづけたシュリーマンが、伝説と思いこまれていた『イリアス』の実在性を、発掘によって証明して世界を驚倒させたエピソードは、誰もが耳にしたことがあるだろう。ところが、かれののこした膨大な手紙類と日記の分析をつうじて、かれが考古学に関心をいだいたのは四〇代になってからであり、少年の夢云々はまったくの作り話であり、かれの名高い伝記も嘘まみれであったことが判明している。ところが、一度根づいた嘘は容易に払拭できず、最近の一般書や学習漫画でも、この伝記を鵜呑みにした記述がぐりかえされている。

小山俊樹「再考・中野正剛「露探」疑惑——政治における「嘘」とその波紋——」は、大正初期の中野正剛「露探疑惑」をとりあげ、政敵を攻撃し真実を隠蔽する「伝統的な嘘」が自ら発した嘘を真実と混同する「現代的な嘘」へと変質してゆく推移を、鮮やかにえがきだす。広範にばらまかれた露骨な嘘が、受容者の都合に応じて信じこまれてゆく。そんなポスト・トゥルース的な「現代的な嘘」が純現代的な事象ではないこと、そして変質した「嘘」をつうじて国家的抑圧が生じた事実は、現代社会に生きる私たちに重い教訓をあたえてくれる。

浜井和史「「嘘」と公文書——在外財産補償問題を事例として——」は、アジア太平洋戦争をめぐる戦後処理問題である

在外財産補償問題を組上に載せ、意図的な情報隠蔽が奏功した事例を論じる。その理由は官僚制の秘密主義にあり、欄外記入のようなメモまでが保存されていたからこそ、隠蔽の実態を復元できたことを強調するとともに、もし文書が廃棄されていれば、「嘘」そのものが闇に葬り去られる危険性に警鐘を鳴らす。そのうえで、公文書の適切な管理および情報公開による検証可能性の確保をあらためて強調する。公文書の不在こそ最大の「嘘」の源泉との提言は重要だ。

朴起兌「韓国における偽史言説の「大衆化」とメディア」は、韓国における偽史言説の「大衆化」を論じる。韓国の偽史言説の展開を長期的な視点から丁寧に整理したうえで、一九九〇年代以降の『退魔録』『コリアドットコム』のブームと、二〇〇〇年代以降の広範な偽史言説の消費・生産とを対比しつつ、後者の背景にメディアの激変を想定する。韓国の偽史言説については、日本でも時おり触れられるが、興味本位のものが多いくらいがあった。本論で提示された、韓国国内の偽史言説の通時的整理は実に有益である。日本の偽史言説との比較検討も、重要な研究課題になりうると予感させる。なお、この巻頭言に（自覚的な）嘘がひとつあることを、末尾ながら付記しておく。

（本会常務理事）